

巻頭言： 東京学芸大学出版会の発展を願って 村松 泰子(東京学芸大学副学長・社会学分野)

2004年のデータだが、1年に1冊以上書籍か雑誌を発行した出版社は約4300社あるという。うち上位100社で総売上げ額の60%を占めるというから、大多数は中小の出版社であることになる（『図説日本のマスメディア第2版』2005）。

文化の創出・維持・伝達という点で非常に重要な出版産業は、こうした多くの中小出版社によって支えられている。我が東京学芸大学出版会も、2001年の設立以来、その一角で頑張っている。事務局長自ら大学の行事などのあるたび、出店して営業している姿を見るにつけ、頭が下がる。ということで、東京学芸大学出版会の発展を願いつつ、いくつか提案してみたい。

中小の出版社が事業を軌道に乗せていくには、一定の販路にのる良書を出版するとともに、ある程度の販売部数を確実に得られる本を刊行する必要がある。書き手が出版社に期待するのは、良い編集者と流通経路・販路が保障されていることだ。

良書を出すための良い書き手は、東京学芸大学出版会にとっては、まずは附属教員を含む本学の多彩な教職員や名誉教授のなかにはいるはずで、編集委員たちにさらなる発掘の努力を期待するとともに、教員たちも我こそはと思う方は手をあげてみてはどうだろうか。

また、本学では、同じ授業科目が複数の教員により何枠も出講されている授業も多い。大学教育の質をあげるという観点からは、多様な専門をもつ人材により学生が多様な視点を学べることは意味があるが、それとともに一つの授業科目のコアにあたるものは共通に学べることも求められる。その両者を活かして、多様な人材が共同で標準的な教科書や参考書をつくることはできないだろうか。教員同士の共同作業は教育の質を高めることに貢献するだろうし、授業に使うことで一定の販売部数も期待できる。広く学外でも利用される形もありえよう。教育実践研究推進機構を通じての共同研究や、文科省の現代GPや教員養成GPの成果の一部も出版という形で、広く世に問うことは考えられないだろうか。

地道にこうした出版を積み上げ、「学芸大」というブランドを活かして、学外の研究者などが、ここから本を刊行したいと思うような出版会にしていきたいものだ。それは、大学のユニバーシティ・アイデンティティとしても価値あることだろう。

ただし、流通経路が確保されないと、書き手もせつかくの研究成果や苦勞を生かせないことや、経済的負担を考えて刊行を躊躇しがちであろう。前書によれば、本の定価の平均的な内訳は印刷・製本などの直接費が45%、編集・営業・宣伝・利益など間接費が25%、小売・取次店マージンなど流通経費が30%という。我が出版会は、流通経費があまり出せないなど、平均とはだいぶ違っている。最近、オンライン・ショッピングのアマゾンを通じて購入できるようにするなど努力されているが、販路の確保が大きな課題である。

ここに書いたことは、いずれも事務局・編集委員の方たちは検討済みのことばかりだろう。しかし、本学の関係者が自分たちの出版会として、これを育てていくために、さまざまな形で参画していけないかと思ひ、あえて書かせていただいた。東京学芸大学出版会が、一部の人のボランティア的な活動に頼るのではなく、大学も協力しつつ、出版社として自立していける日が来ることを願っている。

学芸大 Press News 11号 (Vol. 6 No. 1)

目次:

巻頭言： 東京学芸大学出版会の発展を願って (村松 泰子)	1面
大石学著「江戸の教育力」(学芸大学出版会、2007年刊)をめぐって (藤井 健志)	2面
書評：「江戸の教育力」(坂西 友秀)	2面
「江戸の教育力」と「近代日本における人種・民族ステレオタイプと偏見の形成過程」を読んで (杉森 伸吉)	3面
ご紹介：「近代日本における人種・民族ステレオタイプと偏見の形成過程」	3面
2007年度理事会・総会のご報告 (藤井健志)	4面
編集後記:	4面

大石学著『江戸の教育力』（東京学芸大学出版会、2007年刊、1,260円）をめぐって

藤井健志（本出版会事務局長）

本出版会が今年3月末に出版した大石学先生の『江戸の教育力』がよく売れています。もちろん「われわれの出版会としては」ということで、大手の出版社と比べたら問題にならないのですが、教科書でもないのに発売後数ヶ月で販売数が500冊を超えたのは初めてです。アマゾンや一般の書店からの注文が多いのが嬉しいところです。これはひとえに大石先生の書かれた内容が興味深いものであるからだと思います。

今回はこのプレスニュース紙上で、埼玉大学の坂西友秀先生に大石先生の本の書評を書いていただきました。坂西先生は『近代日本における人種・民族ステレオタイプと偏見の形成過程』（多賀出版）という、これもまた興味深い本を書かれた方です。この本は外国人の日本人観等の点で大石先生の本と重なる部分があります。また本学の杉森伸吉先生に坂西先生の本と大石先生の本とを比較してもらいました。両先生の本をお読みいただき、あらためて日本の歴史、文化、教育の問題を考えなおしてみようというのはいかがでしょうか？

書評： 『江戸の教育力』

坂西友秀

（埼玉大学教育学部教授・社会心理学）



とにかく面白い。わかりやすく、説得力がある。江戸時代の教育というと、現代の教育とかけ離れた歴史的なものと思いがちである。本書は、現代の教育問題をその根本から考えさせる貴重な資料・材料を提供している。教育の根幹を揺るがす大きな改革が矢継ぎ早に進められつつある今日、教育を考え、現代的な意味と意義、そしてその適切・妥当な方向を見出すための貴重な示唆を与えてくれる。支配階級にあった武士だけでなく広く庶民にまで普及した江戸の教育を再考することは、現下の教育の行方を見通す上で有益である。なぜなら、幕府の強制ではなく、社会が熟し市井の人々が自ら教育を欲し、それが「江戸の教育力」形成の原動力になったことを、本書は豊富な事例を元に明らかにしているからだ。

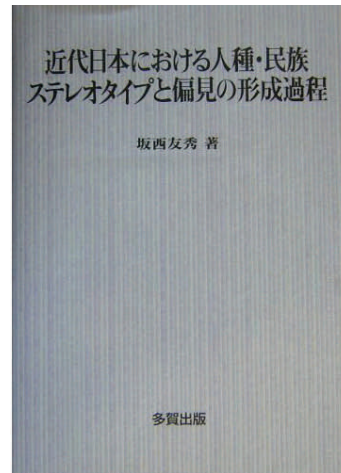
江戸時代には身分制が厳しく敷かれた。士農工商の区分は厳格で、それぞれに身につけるべき教養が決められ、その違いは歴然としていた。豪農豪商は別として、一般の庶民や農民の識字率は限りなく低く、読み書き算はできなかった。こんな観念を私は強く持っていた。しかし、よく考えてみると、農民の生活は、作物を植え、育て、収穫する一連の作業からなり、とても知的なものである。自然を管理し、水田に必要な水量を確保し、収穫量を予想し、年貢を捻出しなければならない。お触れも通知も知らないのでは日常に支障をきたす。生活上、だれしも最低限の教養が欲しいと思うのは当然の願望ではないか。こんな自明のことになぜ気づかなかったのか。一たび庶民が文字を知り数を知ったなら、その教養は彼らの思考と創造の道具となり、民衆の力を底上げする大きな威力を発揮した。大石氏が「江戸の教育力」と呼ぶ所以であろう。

江戸時代に集約農業が発展し、それが教育の普及と密接に関連するとの氏の指摘も新鮮でかつ的確である。大都市江戸が繁栄を誇るには、農林水産業の隆盛は必須である。産業が発展するには、経験から得られる知識・技術が蓄積されなければならない。そこには、生産・流通から消費に至るまで各層の人々の関わり合いがあり、交流がなければならない。農業技術、蒔種・施肥・栽培に関する知識、品種改良、等々、膨大な記録が農書として残されたという。興味深いことに、広く普及した教養を元に、自然と人の生活の調和、そして生態系を生かした循環可能な生産と効率化が追求された。今でいう有機農業だ。江戸の教育と産業の関わりには、今日環境教育の観点から学ぶべきことが多いのではないだろうか。農業の豊かな発展の裏には、当時多数発刊された農書を活用する力を農民につけさせたまさに教育があった。農と教育文化を結びつけた大石氏の考察は洞察に富んだものだ。

藩校・郷校の開設・整備、教科書・教材の開発が、これほど組織的に行われていたことには驚いた。全国にくまなく広がる手習所、中には数百人もの就学者をかかえたものもあったといい、さらに驚嘆した。鎖国は外国に門戸を閉ざした反面、日本人の思考と創造性を深化させる重要な契機になった。海外の文化に大きく影響されることなく、日本の風土にあった創意・工夫をマイペースで発酵させ、独自の社会と文化を形成し、熟成させるのに絶好の環境だったのであろう。その後、西洋文化を絶対基準に据えたことから、江戸と明治の社会的文化的不連続が目立ったのである。寺子屋の行事や「玉松堂」の年間スケジュールなど、近代の学校と手習所の連続性を著者は実にわかりやすく例示している。親をだまして寺子屋を「なまける」子の姿などを通して、江戸の教育がすでに近代の「学校教育」の性格を色濃く持っていたことをユーモラスに実感させてくれる。

著者は、「平和」「文明化」「教育力」の相互関係を再考することの必要性を説いている。「各国・各地が格差を縮小しつつ」、多様な人々が共生することが人類史的な課題である。この理念の実現には、武力ではなく、「平和」「文明化」を推進する意志と知恵こそが必要だ。それを培い支えるのが「教育力」である。筆者のこの結びは、氏の高い識見を示すとともに、深く病んだ現代社会に一条の光を与えてくれる。「男女・貧富の差のない教育制度」と「農民層までの教育の普及」に「江戸の教育力」の本質がある。本著は、混迷する現代の教育の本質と力とは何かを、私たちに厳しく問いかけるものである。

『江戸の教育力』と『近代日本における人種・民族ステレオタイプと偏見の形成過程』を読んで
杉森伸吉 (東京学芸大学教育学部准教授・教育心理学)



歴史学者の大石氏による『江戸の教育力』と心理学者の坂西氏による『近代日本における人種・民族ステレオタイプと偏見の形成過程』は、主題も異なれば対象の時期も「江戸時代」と「中世から近現代」であるが、外国人から見た日本人像などに共通点や連続性も多い。

☆国際的に高かった日本人評価 まず坂西氏の著書であるが、16世紀半ば(450年ほど前)からの資料の地道で重厚な精査にもとづく、外国人観に関する歴史心理学的研究である。江戸時代の外国人が日本人を絶賛していた(『江戸の教育力』)というように、宣教師などの西洋人たちが残した記録についての坂西氏の研究でも、江戸より以前、宣教師が日本にやってきた16世紀半ばから一貫して、日本人が「異教徒の中でもっとも優秀」とされ、礼儀正しさ、公衆道徳の高さ、理解力などの知的能力、物事に取り組む意欲などについて、繰り返し賞賛されていた。

☆歴史の浅い西洋コンプレックス いっぽう、西洋人に対して日本人が持っている憧れと反感や後進意識が混じったコンプレックスは、彼らとの接触が始まった当初(16世紀半ば)にはなく、歴史的に見ると欧米列強との交渉を強いられた、150年ほど前の幕末開国期から明治の文明開化期に形成されたこと、それ以前の300年間は、外国人、特に宣教師などは日本人から迫害され蔑視さえされていたことが坂西氏の研究からわかる。坂西氏の著書の後半部分で紹介されている、日本心理学会の草創期におけるアジアや欧米と日本人の比較心理学的研究は文明開化以降のものである。

☆日本と日本人を見直す良い機会に 西洋人から日本の教育のすばらしさが賞賛されたのと反対に、現在の科学文明観には「欧米では科学がなぜ急速に発展し、アジアではなぜ科学が発展しなかったのか?」という過去の日本を卑下する見方もある。筆者も「江戸時代以前の教育は先進的ではなかった」という暗黙の通念があると思っていた。ところが、日本の教育が中世の頃から、当時科学的水準をはるかに進んでいたと思われる諸外国の有識者達から絶賛されていることが、こうした通念といかにも対照的である。この対照性をどう理解したらよいかという疑問がつのるのである。大石氏の論考を読むうちに、自分なりに2通りの説明を考えるようになった。①欧米では現在と同様、エリート層の科学力は高かったが、大多数の庶民レベルでは日本に比べて、読み書きなどの基礎的素養に欠ける人々が多かった。当時も、最上層のエリートの科学技術レベルを比べると、彼我の差は顕著であったが、日本への訪問者が接する大勢の庶民においては、基礎的能力などの点で明らかに日本のほうが優秀であった。訪問者達が絶賛したのは、あくまで大多数の庶民に関してであった、という説明。②欧米からの訪問者達は、「科学の進歩」という評価軸とは全く異なるが、より本質的な観点から日本の教育を高く評価した。本来の教育の意義が、「科学技術教育」以上に「社会の有為な後継者を育て安心社会を形成すること」にあるとすると、礼儀正しく、社会的秩序が整っていた日本社会とその教育を見て、欧米からの訪問者達は感銘を受けたのだ、という説明。

このほかにもいろいろ説明できよう。両説明は両立もする。ただ、坂西氏の著書を読み、欧米の科学文明に対するコンプレックスが近代に形成されたことを知ると、高度科学文明が形成される以前から日本人が高く評価されていたので、②の説明のほうがより妥当なのかも感じている。いずれにせよ両書をあわせ読むことにより、日本人の伝統的な良さを見直すきっかけになり、有り難く感じているし、教育再生委員会が述べる規範意識の形成についても、昔の日本社会のあり方はぜひぶん参考になるのだろうと感じている。

ご紹介： 坂西友秀 著 『近代日本における人種・民族ステレオタイプと偏見の形成過程』

多賀出版 2005年刊 5,775円(税込み)

著者の坂西 友秀氏は、埼玉大学教育学部教授であると共に、東京学芸大学連合大学院教授も務められている方です。本書は、近代日本における人種や民族に関するステレオタイプと偏見が形成される心理・歴史的背景を明らかにした書です。16世紀半ばから明治初期にいたるまで、日本人は外国人から、道徳性の高さと安心社会の実現、教育の普及、高い知的資質などの点から、賞賛され続けてきたといます。しかし、明治期の富国強兵など、経済的技術的次元での欧米化路線をたどる頃から、日本人は自らの美德を忘れていったことが史実から示されており、加えて現在も残るような欧米に対するコンプレックスは、歴史的には明治期以降のものであることが明らかにされています。

2007年度理事会・総会のご報告

藤井健志（本出版会事務局長）

遅くなりましたが、本年5月23日に行われました東京学芸大学出版会理事会・総会に関するご報告をいたします。ともに①2006年度決算、②2007年度事業計画案、③2007年度予算案、④編集委員長の交代について審議され、いずれも認められました。

(1)2006年度決算について（別紙資料参照）

別紙決算書が認められました。2006年度は本1冊（大石学著『江戸の教育力』）および新しい絵はがきを発行しました。本の出版が遅れたために全体的に売上げが少なくなるとともに、制作費の支払いも少なかったために支出の全体額も低下しました。

収入に関しては年会費収入が順調でしたが、年度当初予定しておりました寄付金（＝大学からの助成金）が国立大学法人の会計システム上難しいことがわかり、断念いたしました。売上げは出版点数が少なかったために減っています。ただし2006年12月にインターネット上の本の販売会社アマゾンと契約をし、アマゾンのサイトで販売を開始しました。また2007年1月に全国の教員養成コースを持っている大学および都道府県立レベルの図書館に宣伝のためのダイレクトメールを送付しました。2007年1～3月はこうした方策の成果が出始め、売上げはやや好転しました。今後こうした成果を期待できると考えています。なお売上げの中には辟雍会（東京学芸大学全国同窓会）より『キャンパス周辺散策ガイド』および「絵双六」を仕入れて販売した売上げも含まれています。これらの出版物は辟雍会が販売権を持っているために仕入れの経費が発生します。

支出の中で刊行経費が大幅に予算を下回ったのは上記の通りです。印刷は『江戸の教育力』に関しては平河工業社、絵はがきに関してはサンプロセスに依頼しました。これらの印刷会社はそれぞれの印刷見積を検討して決定しました（見積は4社に依頼しました）。また『江戸の教育力』の編集は外部のフリーの編集者（樽永氏）に依頼しました。なお大学出版部協会とは継続的に関係を持っており、同協会が開催する著作権に関する講習会等に継続的に参加しています。また東北大学出版会等の他大学出版会からも情報を集めています（「手土産代」はその際に発生したものです）。

2006年度は大学が企画課の事務職員1名による出版会事務補佐を認めてくれたために、税務、会計処理を中心とした作業が大幅に軽減されました。またなるべく学生等のアルバイトを多く使用して作業の軽減を図ったために、事務人件費（謝金）が増加しています。

(2)2007年度事業計画案および予算案について（別紙資料参照）

別紙予算案が認められました。出版経費自体は必ずしも不足していないので、可能な限り出版点数を多くすることを目指します。それには会員が出版をしやすい条件を作らなければならず、そのため「出版の手引き」等の再検討もしていきます。またこうした方策をふまえて今後2年以内を目標として日販、東販等の書籍取次会社との契約を目指します。

(3)編集委員長の交代について

今まで本出版会編集委員長であった筒石賢昭教授が附属大泉小学校の校長に就任されたため、当分の間藤井健志事務局長が編集委員長を兼任することになりました。

以上に関しましてご意見・ご質問がある方は事務局までご連絡下さい。また今回は「売上げ明細書」を添付いたしませんでしたが、ご希望の方はやはり事務局までご連絡下さい。

編集後記: ▼大変遅くなりましたが、Press News 第11号をお届けします。ここまで遅れてしまいましたのは、編集子の責任でありまして、藤井編集長のお力添えでようやく出すことができました。平にお詫び申し上げます。▼今回は、大石 学先生の新刊を巡っての記事を多く掲載する方向で編集させて頂きました。編集者がついて印税も入る、至れり尽くせりの大手の出版社とは異なり、本学出版会の財政上の危機的状況は続いております。にも拘わらず、ご執筆にご協力頂いたわけですから、少しでも宣伝していきたいという思いもあります。幸いなことにAmazon.comでの販売も始められており、徐々にですが、本学出版会にも成長の兆しが窺えます。peer group 性を大切にしながら手弁当で頑張っている出版会に、新たに加わって頂ける会員、そして新事務局員を募集中です。下記連絡先などにお声がけ頂けますと幸いです。宜しく願い申し上げます。(S)

東京学芸大学出版会<会報>プレスニュース 第6巻第1号(通巻第11号)

2007年9月7日発行

編集者: 東京学芸大学出版会事務局 〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1 東京学芸大学構内

発行者: 東京学芸大学出版会 [E-mail] upress@u-gakugei.ac.jp [Web-site] http://www.u-gakugei.ac.jp/~upress/

[本号編集担当]: 藤井 健志(出版会編集長・事務局長)、腰越滋(Press News担当)